

令和3年度運営諮問会議 議事概要

1. 日 時 令和4年1月6日(木) 10時00分～11時50分

2. 会 場 宇部工業高等専門学校 STUDY ROOM (国際寮1階)

3. 出席者

○運営諮問会議委員 (五十音順) 7名

川 村 宗 弘 委員

篠 崎 圭 二 委員

杉 下 秀 幸 委員

堤 宏 守 委員

藤 井 一 憲 委員

三 浦 英 恒 委員

毛 利 勇 委員

○宇部工業高等専門学校教職員 13名

山 川 昌 男 校長

日 高 良 和 副校長

三 浦 敬 校長補佐 (教務主事)

江 原 史 朗 校長補佐 (学生主事)

松 野 成 悟 校長補佐 (寮務主事)

前 田 輝 伸 校長補佐 (事務部長)

田 川 晋 也 専攻科長

碓 智 徳 地域共同テクノセンター長

岡 本 昌 幸 機関評価室長

落 合 積 キャリア支援室長

畑 村 学 留学交流室長

松 本 義 雄 総務課長

原 建 二 学生課長

(陪席) 総務課副課長 総務係

4. 日 程

- 10時00分 開 会
校長挨拶
出席者紹介
資料の確認
議 事
一、議長選出
二、議長挨拶
三、議題
- 10時10分 議題1 ○宇部高専の教育活動等に関する総合評価
- 10時50分 議題2 ○国際交流とグローバルエンジニアの育成
- 11時47分 議長挨拶
校長謝辞
- 11時50分 閉 会
国際寮見学

5. 配付資料

- 令和3年度運営諮問会議開催要領
- 運営諮問会議委員名簿
- 令和3年度運営諮問会議座席表
- 宇部工業高等専門学校運営諮問会議規則
- 議題 資料1：宇部高専の教育活動等に関する総合評価
資料2：国際交流とグローバルエンジニアの育成
- 令和3年度宇部工業高等専門学校学校要覧
- 宇部高専学校案内2022
- 令和3年度宇部工業高等専門学校年度計画
- 令和3年1月～令和3年12月 宇部工業高等専門学校の動き
- その他
 - 学校だより（102号 2021年12月）
 - 国際寮（シェアハウス型学生寮）

(1) 開 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

(2) 校長挨拶

委員の皆様、明けましておめでとうございます。本日は非常に寒い中、年始のお忙しい時期にお越しいただきありがとうございます。また、委員の皆様方には、日頃から本校の教育研究活動に多大なる御理解と御支援をいただいておりますことに重ねて感謝申し上げます。

昨年の運営諮問会議は、一昨年のコロナ対策について御説明させていただきました。それから1年が経ちましたが、いまだにコロナ対策に追われる1年となりました。

しかしながら、昨年と一昨年では、本校のコロナ対策は大きく方針を転換しています。一昨年は、未知のウイルスということもあり、学生の健康・安全を第一に、授業を継続することに重点を置いた対策として、オンライン授業をいち早く導入しました。その結果、学生の日々の学校生活が非常に重要であることを再認識いたしましたので、この1年間は、感染対策を十分に行いながら、学校生活を第一に考えるという方針に切り替えました。残念ながら感染者が出ておりますが、校内での感染拡大にはつながっていませんので、方針を変えてよかったと考えています。

ただし、現在、地域の感染者が急増しています。そのような中で明日から授業が再開されますので、非常に心配なところです。学生寮では、300名という多くの学生を抱えておりますので、寮での感染拡大が最大の心配事です。感染が確認された場合は、オンライン授業のノウハウもありますので、校内での感染拡大防止を最優先に対応したいと考えています。

本日の運営諮問会議では、昨年から引き続きまして、本校の教育研究活動の評価について御審議いただくことが第一でございます。

そして、もう一つの議題は、今回の会場としておりますこの国際寮の設置に代表されますように、本校の大きな特色として、国際交流とグローバルエンジニアの育成が挙げられます。学生の留学による直接の交流とともに、本校においてもグローバルな人材を育成する取組を行っています。この2つについて御説明申し上げ、委員の皆様方からの御意見をいただきたいと思っております。

国際寮が昨年の9月に完成しました。いよいよこの4月からは国際寮を活用して活発な国際交流を始めたいと考えています。本日の会議、少し早めに終わらせていただき、この国際寮の御案内をさせていただきます。

それでは、本日の会議、長時間にわたりますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



(3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、配付資料の確認が行われた。

(4) 議長を選出

総務課長の進行により、本会議の議長として堤委員が選出された。

(5) 議長挨拶

改めまして、皆様、おはようございます。スムーズな審議の進行に御協力よろしくお願ひ申し上げます。

この会議の職務でございますけれども、これはお手元の規則を見ていただくと分かりますように、宇部高専の教育研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長に対して助言を行うとなっております。各委員におかれましては、宇部高専に対しての御助言、それから御意見をいただければと思います。



(6) 議 事

(提議長)

会議の進行は宇部高専から議題について説明、その後、意見交換とします。

まず、本日の議題1「宇部高専の教育活動等に関する総合評価について」、岡本機関評価室長から説明をお願いいたします。

(岡本機関評価室長)

本校の教育活動等に関する総合評価について説明がなされた。

○令和2年度の当運営諮問会議において出された意見に関する対応の状況

*授業改善アンケートについて

・実施時期について

<意見>アンケートは試験後に行っているが、試験の難易度に影響されないように、試験前にやってはどうか。

<回答>会議の結果、当面はこれまでどおり定期試験後に実施することとなった。

・アンケートの無記名式について

<意見>アンケートは現在無記名で行っているが、学生の成績と授業アンケート結果の相関等を検討しようとする、記名式のほうが良いのではないか。

<回答>当面は屈託のない意見を学生からもらうということで無記名を継続することになった。

・アンケート項目の見直しについて

<意見>アンケート項目に、学生が身につけた力など、もっといろいろな項目を追加してはどうか。

<回答>新規項目について今後も継続して検討していく。

・学生の意見を集めることによる業務負担について

<意見>学生の意見を集めることで教職員の負担が大きくなっていくのではないかと。

<回答>昨年度、試行的にオンラインで実施し、問題はなかった。今後は、自動集計システムの導入によって、少しでも負担を減らしながら学生の率直な意見を聴くという体制をつくりたい。



＊昨年度の自己点検・評価結果について

昨年度、コロナでほとんどインターンシップが実施できなかったため、この評価をC「実践力を育む教育というのができなかった」と自己評価したが、厳し過ぎるのではないかという意見があった。実践力を育む教育活動としては、卒業研究やプロジェクト学習、地域教育の科目を用意しているが、これが周知されていないということが問題だと判断し、昨年度の評価はCと変更しなかった。

○本年度の自己点検・評価の中間報告

本校の自己点検・評価を資料1-2に示している。

表の1列目は点検項目、2列目が年度初めに各部署が立てた実施計画、3列目が中間報告として現時点の各部署の実施状況が記載されている。

4列目のA、B、C、ハイフンは、機関評価室の中間評価である。Aは既に実施ができているもの、Bは現在継続中であり、本年度中に実施が完了するもの、Cは改善が必要だということが判断できるもの、あるいは、本年度中には実施できないと判断しているものである。なお、本年度実施しない項目に関してはハイフンで表示している。

・基準1 教育の内部質保証システム（資料1-2 1、2ページ）

本校の自己点検・評価に関する基本方針に基づき、令和2年度の自己点検・評価を実施し、昨年6月に本校ウェブサイトにて、令和2年度の自己点検結果を公表している。おおむね良好であると判断している。

2ページ目の1-2 2に本運営諮問会議における指摘・コメントに対する対応を行っているかという項目を設け、意見がこの自己点検・評価に反映させているかを確認するように改善した。

・基準2 教育組織及び教員・教育支援者等（資料1-2 3ページ）

教育組織及び教員・学内のスタッフに関することについての点検項目については、おおむね良好と判断している。

・基準3 学習環境及び学生支援等（資料1-2 4～6ページ）

学校の設備、あるいは奨学金やクラブ活動、留学に関する指導学生に対する支援を全て含んだ評価で（あり）、おおむね良好であると判断している。トビタテ！留学JAPANに全国高専の中で最多の採択であることを特記事項として挙げている。

・基準4 財務基盤及び管理運営（資料1-2 7～9ページ）

財務や学校の管理運営、各種会議等の点検項目については、おおむね良好であると判断している。

・基準5 準学士課程の教育課程・教育方法（資料1-2 10、11ページ）

科目の配置が適切であるか、採点方法等の点検項目については、昨年度、同一の試験問題が若干見受けられたことやシラバスに沿っていない成績評価があったため、機関評価室がその確認体制が不十分であるという指摘をした。現在は、その確認体制に関して整備中である。

・基準6 準学士課程の学生の受け入れ（資料1-2 12ページ）

入学に関する点検項目については、おおむね良好と判断している。

・基準7 準学士課程の学習・教育の成果（資料1-2 13ページ）

卒業生がどのような力を身につけているかということに関する点検項目については、就職率及び進学率が97.8%、95.3%と非常に高い率を維持していることから、本校の学習・教育の成果が認められると判断した。

・基準8 専攻科課程の教育活動（資料1-2 14～16ページ）

専攻科課程に関して学習・教育の編成、学生の受け入れ、学習の成果など、準学士課程と同様な項目を設けている。成績の評価に関して、準学士課程と同じように、試験問題や成績評価の体制に問題があるということによって再整備を行っている。

コロナ禍においても100%という高い就職率・進学率を維持しており、学習の成果が認められると判断している。

今年度は、専攻科課程入学定員20名に対して入学者が28名であり、1.4倍の入学者となっている。

昨年度までの過去5年間の平均も1.35倍であり、継続的な入学者超過の改善が必要ということでCの評価をつけている。

・基準9 研究活動の状況及び基準10 地域貢献活動等の状況（資料1-2 17ページ）

研究活動及び地域貢献活動等については、1年間で行った成果を地域共同テクノセンターNews & Reportに掲載し、外部に公表と周知ができるような体制となっているため、良好であると判断している。

(堤議長)

御説明ありがとうございました。それでは、本日の議題1「宇部高専の教育研究活動に関する総合評価について」、委員の方々から御質問、御意見をお願いいたします。

(篠崎委員)

校内でのいじめの発生、いじめの未然防止とその相談体制、また若い世代で特に問題になっているデジタルツールを使ったいじめ、デジタル技術に関する倫理観の教育、これらのことは自己評価ではどの項目であるのか。

(江原学生主事)

それらに関しては、「3-22」の担任制・指導教員制と「3-25」相談室の項目にあたる。本校では各クラスに担任を配置しており、学生の状況把握や相談を受けている。また、相談室は学生からのいろいろな相談やいじめに関する講演を実施している。今年の講演は大人数の集合講義ができないため、動画を作成して学生に視聴してもらう方式とした。



(篠崎委員)

宇部市の教育委員会でもLINEのようなデジタルツールを使った様々な問題が発生している。高専は、デジタル技術にたけた学生さんが集まる学校だから、その点が自己評価にあれば、未然に様々な問題が防げるのではないかと思います、質問させてもらった。

(堤議長)

県内の公立高校では、いじめ対策の委員会や研修会を実施しているようですから、御参考にしてください。

(校長)

残念ながら、本校でもいじめは存在する。従来、いじめ問題は学生委員会で扱っていたが、昨年、それを格上げして、いじめ対策委員会という、校長直轄の特別な委員会をつくった。この委員会は、いじめ問題に機動的に、そして丁寧に対応する、また事前防止の対策を行う。いじめに関しては、高専機構も問題意識を持っており、他の高専においても、校長を委員長とする同様の委員会を昨年度からつくっている。

いじめは今年度も数件起こっており、特にSNSを使ったものは、いじめと言えるかどうかの判断が難しく、しかも被害者の心の負担が非常に大きいということを感じた。そのため、インターネットの不適切な利用については厳しく処分する方針とし、そのことを学生に対しても周知している。篠崎委員から御指摘いただいたように、それを評価する具体的な項目がないので、見直しを検討する。

(藤井委員)

子どもたちの声を吸い上げるシステムとして、高等学校では定期的に子どもたちのいじめアンケートというのをやっている。また、宇部市内の中学校では、毎週1回、必ず子どもたちからいじめに遭っていないか、困っていることはないかというアンケートを行い、市教委でも年に2回ほどアンケートを行っている。このような取組は高専でも行っているのか。

(江原学生主事)

本校では、「こころと体の健康調査・学校適応感尺度調査」を4月と10月に実施、年2回の「いじめに関する講演会」時のアンケート実施で、計4回を学生の声などとして吸い上げている。

(毛利委員)

企業にとっても、人材育成は非常に重要である。私としても、今の若い人が何を欲しているのかということは非常に興味がある。このアンケートの中で、勉学に対してもっとこういう教育をしてほしかったとか、こういうことを学びたかったという意見があれば、教えていただきたい。

(岡本機関評価室長)

学生が卒業するときに卒業生アンケートを実施しており、本校の教育に関する満足度をはかるような項目は設けている。アンケートには自由記述欄があり、そこには科目のことや卒業研究がどうだったなどの様々な意見が書かれている。アンケートを集約したものを教員が閲覧できるようにしている。

(毛利委員)

その意見の解析をしてみて、学生が何を求めているかというのをきちっと把握して、学習の内容をもう一回再構築していくということが必要であろう。

(岡本機関評価室長)

アンケート結果の有効利用が十分に成されていない現状があるため、データをどう扱っているかということ、自己点検に取り入れるよう検討している。

(川村委員)

基準10の地域貢献で少し気になったのだが、我々企業支援の立場で中小企業を訪問するときに、なかなか高専の卒業生が採用できないという声を聴く。これは、高専との連携ができてないから、高専の事情等が理解されていないからだという気がする。

産業技術センターには研究員が40名在籍しており、ぜひ、相談ができるような窓口やキーマンとなる先生方を紹介していただくような連携を行いたいと思っている。



(碓地域共同テクノセンター長)

ただいまのコメントに対して、私どもの取組を御紹介する。

窓口は企画連携事務室の連携係であり、そこで受け付けた技術相談は、地域共同テクノセンターが対応している。この情報の外部発信が十分ではないかもしれないが、本校の活動をサポートする企業の団体である宇部高専テックアンドビジネスコラボレイト（宇部高専T&B）の企業会員へは周知している。企業会員から相談を受け、共同研究に進む可能性があるものには、事前調査などの予算補助を宇部高専T&Bが行う制度を昨年度に整備した。ぜひ一度お話をさせていただいて、御活用いただければと思っている。

(川村委員)

加えて、例えば経済産業省の補助金を企業と共同して取りに行くなどの体制づくりも行いたいので、お願いしたい。

(篠崎委員)

宇部高専には、地域貢献活動において、昨年度から宇部市の中学校等でのデジタル教育という面で様々な御協力をいただいている。また、本日のメンバーのほとんどに加入していただいている宇部市成長産業推進協議会においても、高専という立場から貴重な御意見をいただいております、改めてお礼を申し上げます。引き続き、市と連携しながら活動を進めていきたい。

(三浦委員)

初めての参加であるため確認したいが、自己点検・評価というのは、何年ぐらい実施しているのか。

(岡本機関評価室長)

自己点検に関しては、2004年に独立行政法人になってから継続して実施している。

(三浦委員)

今回初めてとして見てみると、点でしか見えなくて、要は過去何年ぐらいからどういう課題があって、どういう形で改善したかというようなチャートのようなものがあると、分かりやすいと思うので、御検討いただきたい。



もう一つ、我々ものづくりしている会社にとって、5年間というものづくり教育をしていただいた学生が入社してくる中で、アンケートにどんな意見があるのかが興味がある。実は弊社で品質問題があり、3年前から今年にかけて品質アンケートを実施した。グループで1万人ぐらいを対象として、回答率は95、6パーセントであった。通常のアンケートは最後にコメント欄があるが、私は一つひとつグルーピングした後にコメント欄を設けた。するとコメント欄には2,300件ぐらいの記入があり、いろ

いろな課題や品質に対しての従業員の思いがわかった。多分、アンケートの最後でコメント記入とすると、気になっていることを忘れて書けないことになると思うので、参考として紹介した。

この自己点検・評価は、学校教育法のもとでの実施でしょうから、基準は指定されており、基準4までが学校の基盤となる環境整備、基準5、6が教育をどうしていくか、学生の要望で改善していくソフト面・ハード面であると解釈した。先の過去からの連続性という観点から検討していくと、時代も変わってきているし、学生の質というものが全く変わっていると思う。

我々、当初のDX（デジタルトランスフォーメーション）をやっているが、3年後の新入社員からは、これは古いDXですよと言われかねない。また、学生は環境問題にも敏感になっていて、我々が現在実施しているESG（企業の長期成長に必要な3つの観点 Environment：環境、Social：社会、Governance：ガバナンス）が、本当に彼らにとっては良いのかというと、私は全然違うという感覚を感じている。

現在、教育を受けている人たちとのギャップをいかに埋めていくかというのが、当社の課題であり、そのような観点でアンケートを取ると、先取りした形でいろいろ見えてくると思う。学生の考えやニーズというものを我々に教えていただけると、それをキーワードとして、一緒に何かできればと感じたので、御検討いただきたい。

(堤議長)

ありがとうございます。DXなどは、若い人のほうが、かなり感度が高いでしょうから、工夫をよろしくお願いします。

(杉下委員)

先ほどの毛利委員からも提案がありましたが、人材育成という話になると、我々が欲しい人材は、能力を持つということはもちろんだが、その能力を生かせる人材である。最近、与えられた世界に育った人が多く、自立した精神をもって、自分から能力を発揮しようということを思っている人が少ないのではと私は感じている。

この点検項目の中で、学生を評価したところがあるが、自立した人間というものをトータル的に評価したのも必要ではないかと思う。こんな人間になりましたねというところは、この点検項目の一つ一つを集めたような形の評価でしかわからない。その辺を意識した形で学生を育てていくということが要と思う。

私の経験からすると、高専の卒業生は企業としては当たりはずれがない。入学時から地頭は良いし、高

校の教育のようなものから専門の方に向かう時の段差がない。子どもから大人になっていく、そこに段差がないので、まじめな、性格的に穏やかという、非常にまとまった人物となっている。

一方、高校から大学へ進学となると、高校からの流れがぶつんと切れる。育つ環境ががらっと変わる。風船が切れたように遊ぶ人もいるし、崩れる人もいる。大学卒は偏差値の高い大学と言われても、学生の育ち方にもものすごい差があると思う。そういった意味でいうと、高専はそんなに差がない。一貫した流れの中で専門教育までやっている教育システムとしては、その辺に特徴があるのかなと私自身は考えているので、その辺を生かしていただきたい。

(堤議長)

ありがとうございました。大学にいる身にとってはちょっと辛いコメントでしたが、我々も努力していますので、よろしくお願いします。

私からは、基準の3「3-26」の項目で、キャリア相談や資料室整備など就職の支援が行われているが、相談件数が妥当な値なのかを知りたい。

(落合キャリア支援室長)

このキャリア相談件数というのは、キャリア支援室の教育コーディネーターが受けた相談件数であり、件数が妥当かどうかは分からないが、件数としては多いと考えている。

本校では、各学科の担任や就職担当に就職や進学の相談をするというのが第1段階である。

(堤議長)

そういう仕組みがあるのであれば、是非うまく生かしていただければと思う。ありがとうございます。

(堤議長)

それでは、議題1に関しましては、以上で締めさせていただきます。委員からの意見等を生かしていただけるように活動に反映をしてください。

それでは、次の議題2「国際交流とグローバルエンジニアの育成について」、三浦校長補佐、それから畑村留学交流室長から説明をお願いします。

(三浦教務主事)

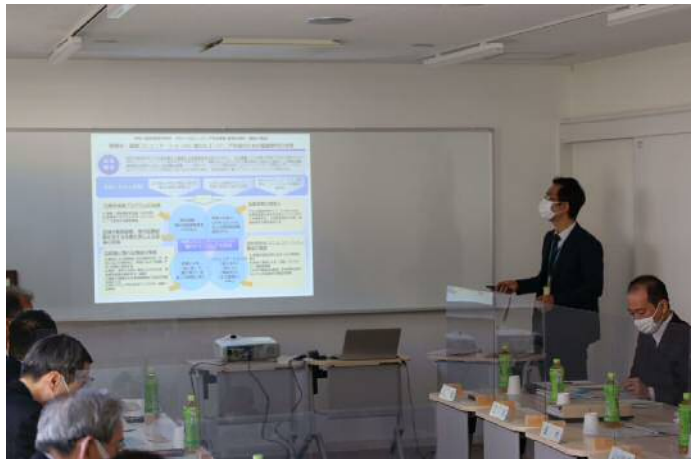
本校が行っている国際交流活動のひとつである、グローバルエンジニア育成事業について説明を行う。

・高専機構が推進する事業の一つである「国際コミュニケーション力に優れたエンジニア育成のための基盤教育の充実：通称グローバルエンジニア育成事業」という、本科1～3年生を対象として、全科目にて英語による表現を学ぶ機会を設定し、国際コミュニケーション能力向上を展開するという事業が採択されてから、今年3年目を迎えた。

・本校のグローバルエンジニア事業は、次の5つの項目について実施している。

1. 海外体験プログラムの改善

コロナ前は年間100人程度の学生が海外の学術交流協定校に行って語学研修、研究活動に参加していたが、去年からコロナで、全く本校の学生を海外に送り出すことができなかった。そのため、今年度は、オンライン研修のプログラムを本校の留学交流室と学術交流協定校とで構築した。マレーシアのマラ工科大、シンガポールポリテクニクではオンライン語学研修プログラム、韓国の永進(よんじん)専門大学では情報工学の研究研修プログラムを開発し、今年の夏はそれらのオンラインプログラムに学生が参加した。



オンラインの研修に参加した学生は、通常の海外研修や語学研修と同様、報告書提出と報告会での発表を行い、単位取得を認めた。

2. 海外勤務経験・海外企業経験を有する卒業生等による講演実施

海外勤務経験や海外起業経験等を有する卒業生に学内講演とオンライン講演を実施して、学生のグローバルマインド醸成の機会とした。

3. 英語に触れる機会の増加

低学年科目の英語による授業まとめの実施、このグローバルエンジニア事業で雇用しているマレーシアの特命助教シティ先生との日本語・英語併用授業を化学と数学での実施は継続している。例えば、私が担当する数学は、講義の科目と演習の科目と2種類あり、講義の科目では私が日本語で数学を教える。その後、学生は数学演習という科目で、日本語で習った内容をシティ先生が作成した英語による解説動画を視聴してから、演習問題に取り組み、最後に、私が日本語で解説を行っている。全く新しいことを英語で勉強するというのは大変だが、一旦日本語で勉強したことを英語で復習することで、学生の数学と英語の理解が進んでいる。また、化学の授業でもシティ先生と化学担当の教員がチームを組んで英語の授業を展開している。

4. 語彙数の増加

語彙数増加の活動は、少しウィークポイントがある。本校は語彙力の増加のために、eラーニングシステムを購入し全学的に展開しているが、学生は他に楽しいこと、やりたいことがたくさんあるので、eラーニング利用にはなかなか目が向かない。アナウンス不足ということもあるが、参加者を増やすにはどうしたらいいか、頭を悩ませている。

今年度は、同窓会と後援会からの予算援助によりコンテストを開催して、評価上位の学生に記念品の贈呈したところ、第1回目の期間で約60名の学生が参加した。ただ、学生数1,000人規模であるから、60名は少ないと考えている。今年度第2回目のコンテストでは、参加学生が増えるような工夫が必要だと思っている。

5. 日常的なコミュニケーション機会の増加

この後、留学交流室長から詳しい話があるが、シティ特命助教と本校の長期留学生にも協力してもらって、日本人の学生と色々なアクティビティで英語を勉強するという取組を行っている。

・今後の課題

- ・eラーニングの利用者拡大について、来年度は1年生の科目にeラーニングを含めることを検討中である。
- ・グローバルエンジニア育成事業の実施要項に、2024年度から外国籍教員の定員内への配置が義務づけられているので、その採用について校長先生と検討している。
- ・授業の英語まとめについて、他の科目への導入を摸索する。

(畑村留学交流室長)

今日の話の中心は、コロナ禍でどうやって国際交流活動を実践してきているかという現状の報告です。

○高専の国際交流について

・国内の生産拠点が徐々に東南アジアや東アジアに移っていく関係で、高専卒業生もエンジニアとして海外出張や赴任する機会が圧倒的に増えている。

・ところが、高専生は英語が苦手な学生が圧倒的に多い。閉じられた世界で5年間過ごすので、コミュニケーション力も普通の高校生、あるいは大学生と比べると難がある学生



もいる。

- ・各高専で、国際交流を一生懸命やろう、英語をしっかりと勉強させて英語を身につけて卒業させて、海外にどんどん出ていくようなそういう学生を育てようという動きがここ何年で起こっている。
- ・宇部高専は、全国の高専の中でも国際交流に力をいれて、積極的に取り組んでいる高専のひとつである。

○宇部高専のグローバル化への取組

- ・今から10年ぐらい前は、夏休みや春休みを利用して20名、30名ぐらいの学生が毎年学術交流協定校に行っていた。2018年コロナの前には短期留学生在が105人となり目標の100人を超えた。2019年は新型コロナウイルス感染発生で海外渡航が中止になったが、年度初めの短期留学募集には、夏休みに92人、春休みに11人の合計103名の申し込みがあった。
- ・海外に渡航する学生が増えると、比例して、受入れの短期留学生の人数も増え、2017年には61人の協定校からの学生が、短くて1週間、長ければ半年ぐらいの期間の研修を本校で行った。
- ・昨年と今年は、コロナになって受入れも派遣も中止となっている。
- ・宇部高専の国際交流の始まりは、宇部市と姉妹都市を結んでいるオーストラリアのニューカッスル市にあるニューカッスル大学との2003年の学術交流協定締結からである。その後、2004年韓国の東儀科学大学、2007年中国のハルビン工業大学、2008年ロシアのコムソモリスク工科大学と協定を結んでいる。このうち、ハルビン工業大学とコムソモリスク工科大学は、宇部市の仲介という形の宇部市との連携でスタートした。
- ・2014年頃から、在外研究制度を利用して多くの教員が海外の大学等に行くようになり、2015年から現在に至るまで、国の助成金等の外部資金を獲得して国際交流活動を加速させてきたという経緯がある。
- ・2017年と2018年、コロナの直前のこの2年間に高専機構のKOSEN4.0イシアティブ「国際化の加速・推進」に採択されて、学内のグローバル化と地域のグローバル化に宇部高専が貢献するという内容であった。学内のグローバル化は、一定数いる海外に行かない学生を対象として、受け入れた短期留學生と共に学内でいろいろな活動をさせることによって、グローバルマインドをキャンパスにいながら身につけさせるというものである。地域のグローバル化は、短期留學生に地方都市を知ってもらう、そして地域の方々にも外国を知ってもらうことを目的に、受け入れた留學生を地域にどんどん開放する活動であった。
- ・2019年に高専機構のグローバルエンジニア事業が採択され、2023年までの5年間の事業である。

(活動例)

- ・台湾の文藻外語大学受け入れ短期留學生

＜日本語学科の留學生＞1週間のインターンシップを学内、宇部市役所、あさひ製菓の店舗であるシュクルヴァンやシュシュで行った。

＜英語学科・将来英語の先生になる留學生＞宇部高校の国際交流イベントに参加、見初小学校と川上小学校の英語の授業に週1回、半年間にわたり派遣して小学生の英語教育と交流活動。

- ・2019年度参加学生数（資料3ページ）

応募が103名、実施が92名、11名は2022年3月春の研修がコロナ感染拡大防止のため中止であった。内訳は男子62人、女子41人。人数としては男子のほうが多いが、割合としては女子のほうが多く海外に行っている。また、学年別内訳は、3年生が60名、2年生が11名、1年生が10名、4年生8名、専攻科生14名となっている。3年が多いのは、高校生が修学旅行に行くような感じで夏休みに海外に行くという雰囲気ができているからである。1年生、2年生の参加は、高校1年生、2年生で海外研修に行く機会は少ないなかで、3年生、4年生と同じように参加できるということがよい刺激になっているからだと考えている。

中学校の進路指導で、高校に行ったら海外に研修に行きたいと相談すると、宇部高専を勧められて入学している学生もたくさんいる。

- ・2019年度研修先別参加学生数（資料4ページ）

オーストラリアのニューカッスル大学、シンガポールのポリテクニク、マレーシアのマラ工科大学、台

湾の文藻外語大学と聯合大学、韓国の永進専門大学と宇部高専はかなり深く交流していることがわかる。語学研修だけではなく、教員の共同研究も実施している。

トビタテ！留学JAPANは、文部科学省と民間が協働で2013年から行っている高校生と大学生向けの留学促進キャンペーンである。本校は2015年度に始まった高校生コースに4名採択からこの事業を活用している。2019年は9名採択、2020年はコロナで中止、2021年は高校生コース10名、大学生コース2名が採択されている。2019年、2021年の採択数は全国の高専で最多であり、高校を含めても中四国地区で宇部高専が1位の採択数である。これは協定校と連携しながらいろいろな国際交流活動をやっていることを学生が理解して、もっと違う機関とか研修内容とかを学生自身で考えて、書類を書き、実現していくという学生が出てきているからだと思っている。

○コロナ禍での国際交流活動

<2020年度オンライン国際交流活動 資料8～13ページ>

「オンライン放課後英会話教室 ニーハロ」

・令和2年度（2020年度）4月、本校の授業がすべてオンライン授業となった。新入生の中には、国際交流活動をやりたいという学生がたくさん存在する。そういった学生のモチベーションを下げないように、4月下旬からシティ特命助教によるオンライン放課後英会話教室「ニーハロ」を実施した。希望者は多かったが、1年生、2年生を優先的に10名程度の3グループを週1回で開催した。週1回の登校ができるようになったときは、登校日にシティ先生の部屋に来てアフタヌーンティを楽しむ時間も作れた。

「2020年度学術交流協定校とのオンライン交流活動」

・台湾やマレーシアの協定校に相談して、8月頃からオンラインでの交流活動を始めた。台湾で唯一の外語専門の大学である文藻外語大学とは、マンツーマンで1か月間、毎日中国語をオンラインで学ぶプログラムに12名の学生が参加した。また、文藻外語大学日本語学科の学生が高専の同世代の学生と日本語でおしゃべりをするという「ニーハロ JAPANESE」を10月から12月に台湾学生6名と本校1年生10名、3年生2名を3グループに分けて、毎週1回を実施した。

高専機構が全国の高専と交流できるように包括協定を結んでいるマレーシアのマラ工科大学と昨年度からオンラインで英語と日本語で交流する「Student Leadership & Networking Seminar」をマラ工科大学の学生17名と本校学生17名（専攻科生1名、3年生3名、2年生8名、1年生5名）の参加で実施した。

<2021年度国際交流活動 資料14～29ページ>

「DMM英会話の活用」

・昨年2020年度のオンライン研修は延べ119人、今年度は、春の研修を除いて、現時点で延べ240人の学生が参加できている。そして、実際に渡航できていないので学生の満足度は低くなっている。しかし、多くの研修の機会を作り出すことで、繰り返し参加できることはメリットであると考えられる。

・現在、海外に行って英語を学ぶ機会が中断されているので、2020年10月から希望する学生に対して、オンラインのDMM英会話を提供している。これは、普通に受講すると月料金が6,700円であるが、団体受講人数が250人以上では月料金2,000円程度で受講ができるため、第4ブロック（中・四国地区）の高専と連携して、団体受講660人として実施している。

「2021年度学術交流協定校等との交流活動」

・昨年度と異なる活動は、経営情報学科を対象とした、韓国の永進専門学校との「異文化研修交流」と台湾の文藻外語大学との「ビジネス英語」、マレーシアのマラ工科大学とシンガポールのポリテクニクとの「夏季語学研修（英語）」、そして永進専門学校との情報工学の研修を内容とした「夏季海外研修」である。「夏季語学研修（英語）」と「夏季海外研修」は単位が取得できる研修として実施した。また、「夏季海外研修」は内容がプログラミングであるため、3年生以上の学年と制約があったが、ネット環境に適した研修といえる。

・シティ特命助教による英語教室「ニーハロ」は、対面方式で1学期は週3回、2～4学期は週2回、英語を使ったアクティビティを行った。この教室のポイントは、3年生に編入する長期留学生の参加である。現在、本校にはマレーシア4名、モンゴル3名、ラオス2名の長期留学生が在籍している。長期留学生が交流する日本人はクラスメイトが中心で、他学科や学年の異なる学生との交流が少ないため、本校の国際交流活動で日本人に馴染んでもらうことも目的としている。

「グローバルエンジニア育成事業 海外勤務経験・海外企業経験を有する卒業生等による講演」

- ・2021年度は、5名の海外で活躍する卒業生による講演を基本的にオンラインで実施した。
 - ・JAXAでロケットの開発を行っている制御情報工学科卒業の浅村岳さん。
 - ・アメリカのサンフランシスコにある会計事務所で働いている経営情報学科卒業の大前麻由美さん
 - ・東京のリース会社からアメリカのミズーリ州の現地駐在員で赴任している経営情報学科から広島大学経済学部に編入学した河村真理子さん
 - ・スウェーデンのバッテリー会社で研究開発に従事している物質工学専攻修了後にベルリン工科大学大学院に進学した金子慎嗣さん
- ・デンマークやカンボジア、インドなどでの研修プログラムを開発し、屋久島で旅行会社を起業した物質工学科卒業後に広島大学生物生産学部に編入学した村上卓さん

○宇部高専の国際交流推進について

<学生の国際交流組織 資料30～36ページ>

・国際交流推進において大事なことは、教員が全て準備して学生に参加してもらうということではなく、学生自身がやりたいことをどんどん提案して、学生自らが計画し、実行する環境づくりである。本校には、学生が国際交流を推進する組織が2つある。

「学寮国際交流委員会」

・国際交流が活発になり始めた時期、2016年に学寮に、放課後の寮で行う長期・短期留学生と寮生の交流活動を企画・運営する委員会として「学寮国際交流委員会」が作られた。短期留学生の受け入れが始まれば、いま皆さんが座っているこのスタディールームが交流活動を行う場になる。

「学生会国際交流部」

・今年度、学生が主体となり国際交流活動ができる環境を作ることを目的に、学生会が「国際交流部」を立ち上げた。学寮国際交流委員会は、学寮内での活動であり、一般の学生が学校や地域での国際交流活動を行う時には、留学交流室のサポートという立場であった。これからは、学生会組織が行う活動のひとつとして、国際交流活動が活発になることが期待される。

「グローバルマイスター認定制度と宇部ロータリークラブからの支援」

・本校は、海外研修に参加、あるいは学内の国際交流活動を積極的に行った学生をグローバルマイスターに認定するという制度を2015年度に設けており、この制度をきっかけとして、学生にどんどん国際交流活動に参加して、グローバルマインドを身につけてもらおうと考えている。

また、グローバルマイスターのステータス向上のために、昨年度から、宇部ロータリークラブの支援を受け、グローバルマイスターに認定された学生への奨学金支給を行っている。

宇部ロータリークラブは、内良（うちら）奨学金制度を設けており、宇部市内の高校在校生（各高校2名まで、最大16名）へ奨学金を給付するという制度である。宇部ロータリークラブが高専への協力を考えているとのことで、両者で検討し、本校の代表的な活動となっている国際交流活動を一生懸命やっている学生たちに支給ということになった。

「国際寮」

・国際交流の拠点となるべく全国51高専中17校に予算措置されたもので、中国地区では津山高専と本校の2

校に設置され、令和4年2月28日に谷口功高専機構理事長等を来賓として招き、竣工記念式典を挙行了。国際寮は、鉄筋コンクリート造3階建てのシェアハウス型構造で、運営諮問会議を行っているこのスタディールームとシェアルームの交流スペースと6～7室の個室からなるユニットが男女別に計10部屋あり、入居定員は68名である。長期留学生あるいは短期留学生と日本人学生が日常的に交流する。そのため、毎日の生活が国際交流、英語力と日本語力向上となるように4月から行っていく計画にしている。

(堤議長)

ありがとうございました。

それでは、委員から御意見や御質問がありましたら、発言をお願いいたします。

(杉下委員)

先ほど自立した人材ということを行ったが、グローバルエンジニア育成事業の海外勤務した卒業生による講演の5名は、私が言った自立した人材にはとどまらない方々である。自立したというのは、レベルがいろいろあるが、収まり切れないぐらいのレベルの自立した人材であると思う。そして、技術力も飛び抜けて成績が良かった人物ではないかと私自身は思う。そこで、グローバル人材としては、最初のページには語学関係のことが中心に書かれているが、この前提にあるのは、技術力であるということは絶対に学生には忘れてほしくない。



私の企業時代には、海外の企業からいろいろな人材派遣の要請を受けた。例えば、タイの企業からは、技術力のある人間をとまず言われる。コミュニケーションは、言葉が分からなくても、聞く努力を、理解する努力をするから心配はないから技術力のある人間を派遣してくれと言われた。だから、それに見合った人間を派遣した。ヨーロッパに派遣するときには、技術力は当然であり、コミュニケーション力がないと駄目と注文がつく。国によって必要とするスキルが違うが、技術力は基礎として必要で

ある。

実際のビジネス環境においては、技術力プラス、コミュニケーション力ということだと思う。学生の中には、海外経験を通じて、技術力ではなくてコミュニケーション力で十分と思う人がいると思うが、そういう人たちは、食事や観光の経験からであって、ビジネス環境では技術力が必要不可欠だといえる。

次に、トビタテ！留学JAPANの採択者の写真を見ると、全て女性ですね。やはり、時代は変わったなと思う。企業でも、TOEICの点数を900点ぐらい取る人は、ほとんどが女性です。今、教育現場の中でも変わってきているのだろうと改めて思った。ですから、この会議で男性の皆さんが座っていますが、この中に女性が入らないと駄目だという感じがする。

また、英語に触れる機会の増加の活動があるが、これはあくまでもきっかけであって、学生がこのような機会に触れて、卒業した後も英語をやっつけていかなければいけないというモチベーションにつながるような、動機づけになるような、活動に高めていく必要があるという気がする。単に、学生時代に経験しましたというだけではなくて、続けていくという観点が要ると思う。

質問としては、海外派遣先に、ニューカッスル大学や威海大学があるが、これらは宇部市の姉妹都市という関係でつながりができているのか。

(畑村留学交流室長)

そうです。ニューカッスル大学と威海大学は、宇部市の姉妹都市とのつながりから生まれた。

(杉下委員)

宇部高専が単独で派遣を行っているようだが、高専ネットワークで研修プログラムを作って派遣する方法

もあると考えられる。単独での実施は、どうしてもマンパワーがかかるため、高専ネットワークを使って順番で責任持って、派遣の機会を増やすということも必要な気がする。

(畑村留学交流室長)

第4ブロック（中・四国地区）の高専が連携した派遣活動も行っている。

(毛利委員)

先ほど杉下会頭がおっしゃられたように、技術力が一番必要だと思う。それに、海外に行きたいと手を上げる力が必要である。それらの力をつけるうえで、非常に良い教育環境を学生に与えられていると思う。

この国際寮は、宇部市に家がある学生も入れるか。

(校長)

希望者は全て入れる方針。一方、定員を超過した場合は、学校に通える方には御遠慮いただくことはある。現在は、希望者全員が入れている。

(毛利委員)

海外派遣は、かなりの人数の学生が行かれるが、準備不足で行ってしまうと研修の成果が上がらないし、日本人だけで集まる場合もある。できたら少人数で、期間をずらし分散させて派遣するほうが良いのではないかと思う。先生方は、計画が大変だと思うが、少人数で海外に行かせる効果はこれまで以上にあがると思う。

(藤井委員)

まずはお礼を言いたい。トビタテの事業に本校（上宇部中学校）の卒業生が1年生で採択されており、ご指導をいただきましてありがとうございます。高専を志望する子どもたちを見ていると、何か芯になるもの、高専でこれがやりたいという明確な意思を持った子が高専に行っている。まさに、この子は英語がやりたい、プラス芯になるものがある子だったので、高専でこれがやりたいという強い気持ちをもって挑戦したと思う。そういう子たちに育てていただいているのだと、本当にありがたく感謝をしている。

また、女性ばかりが選ばれていますねという話もあったが、裾野を広げていく必要もあるだろうと思っている。特に、オンラインというものが、国際交流においてはハードルを下げたところがあると思う。ハードルが下がったことによって、引っ込み思案な男性にも機会が広がっていかばいいと思う。オンラインを上手に活用して、いろいろな子たちに経験ができるようにさせてあげてほしい。

(篠崎委員)

最終的には、全学生のどれくらいがこれらの事業に関わるという目標設定はあるか。

(畑村留学交流室長)

教務主事から話があったグローバルエンジニア育成事業は、授業に取り入れているので、全学生が参加している。

海外研修に関しては、一定の条件をクリアした学生を送るという方針で、人数にはこだわっていない。100人以上の学生がお金を出して、自主的に海外研修に参加している高専は他にはない。自主的に参加を



しているが、旅行のように考えている学生も存在するので、参加の条件をあげることも考えている。

(日高副校長)

現在、国際交流事業に参加する学生は、平常時で年間100人、5年間で500人となり、1,000人の学生の半分は実際の海外で、残りの半分はオンキャンパスでグローバル人材の養成を行うという方針である。渡航費は、日本学生支援機構の海外留学支援制度の利用と中学校等というPTAにあたる後援会から年間200万円の支援を受け、学生一人あたり3、4万円の支給を行っている。

先ほど、畑村から、短期留学生が小学校などで英語教育に協力する話があったが、それ以外でも、茶道体験など日本を知ってもらおうという活動を近隣のNPO法人の協力で実施している。このような活動が宇部市の方針に合えば支援していただきたい。また、中学校でも本校の留学生を活用していただければと思うので、また御相談させてください。

(堤議長)

予定の時間となりましたので、これをもちまして議事を終了させていただきます。委員の皆様におかれましては、いろいろ御意見をいただきまして本当にありがとうございました。

それでは、議長の任を解かせていただきます。

(7) 校長謝辞

本日は大変貴重な御意見をいただきありがとうございました。本校の教育研究の評価につきましては、評価のための評価ではなく、それを実際の教育内容や活動に反映し、改善していく行動につなげるための評価であるべきという御指摘をいただいたと理解いたしました。これにつきましては今後検討させていただきたいと思います。



また、国際交流については、いろいろな取組を自慢しているような説明になってしまいましたけれども、高専の学生は進学高に比べると、英語力が圧倒的に低いのではないかと考えています。高校、大学の学習内容を5年間に圧縮しているのが高専の制度ですので、英語の授業時間が少ないという面はあります。そういう状況においても、実践力、コミュニケーション力をつけるために、様々な取組を行っています。現在は新型コロナウイルスの流行により海外に行けないという事情があり、留学を希望する学生に対しては非常に申し訳ない気持ちです。一方で、留学しない学生の国際感覚をどう育てるかというのが今後の課題であり、そういった裾野を広げるという意味で、今回のオンラインでの試行はコロナ後でも有効ではないかと考えています。

本校の特色は、意欲のある学生にはいろいろなメニューが揃っており、能力を伸ばせるような制度になっています。その大きな特色を今後もPRしていきたい。一方で、高専教育の基盤も非常に重要であり、それは技術力であるという御指摘のとおりであると思います。

本校の特色は、意欲のある学生にはいろいろなメニューが揃っており、能力を伸ばせるような制度になっています。その大きな特色を今後もPRしていきたい。一方で、高専教育の基盤も非常に重要であり、それは技術力であるという御指摘のとおりであると思います。

今年は高専制度ができて60周年に当たります。本校は第1期校として創設されましたので、今年が創立60周年になり、還暦を迎えます。私も今年還暦を迎えます。人間は老化が進むだけですが、学校は幾らでも再生できます。これからも宇部市、山口大学には御協力いただき、また、地域の企業とも相互に連携を進めていくということが非常に重要であると思いますので、地域の企業にも、今後とも御協力をお願いしたいと思います。本日は大変ありがとうございました。